

口絵解説

本巻の口絵には、花蹊の母幾野の出里である寺田善左衛門家の御後裔寺田静雄氏のご厚意により、寺田家伝来の屏風および掛幅を収載するを得た。

1、「秋光豊穂之図」(寺田静雄氏蔵)

掛幅一軸。紙本墨画。

縦一三二cm×横四十八・七cm。

制作年、明治後期カ

箱書、「秋光豊穂之図」(後人箱書)

署名、「花蹊女史写并題」

印記、跡見(朱文方印、陰刻、「瀧」のみ陽刻)

瀧印

花(朱文方印、陽刻)
蹊

題文は以下の通り。

一日散步邨園 老樹刺天 其下

茅茨錯落黃稻如雲 可以卜有年

矣 余既愛野趣之幽閑 亦想稼穡

之艱難 作此図 將欲以似城中

士人也 花蹊女史写并題

一日散步^{スレバ}邨園^ヲ、老樹^樹刺^シ天^ヲ、其下^ノ茅茨錯落^{トシテ}、黃稻^ク如^ク雲^ノ、可以^シ卜^テ有年^ヲ矣。余既^ニ

愛^シ野趣^ノ之幽閑^ヲ、亦^タ想^ヒ稼穡^ノ之艱難^ヲ、作^シ此^ノ図^ヲ、將^ス欲^シ以^テ似^{サント}城中^ノ士人^ニ也。花蹊女史

写并題^シ。

自然の閑趣、また秋季豊穰の背後に農作業の困難あるを知ることの大切さを説く。「稼穡之艱難」(農耕の苦勞)を知ることとは、『書経』以来、君子の徳目とされており、「田家稼穡図」は、「稼穡之艱難」を知るための画でもあり、また本図もその意図に従う。

本図は「鯉魚蘆雁図屏風」と同じ印を用いており、画風・書風も併せ、明治後期の制作かと推定しておく。

出典・参考等

『書経』周書・無逸

嗚呼、君子所其無逸、先知稼穡之艱難、乃逸、則知小人之依

『金史』卷五・本紀第五・海陵

(天徳三年) 三月庚寅、以翰林學士劉長言等為宋生日使。壬辰、詔広燕城、建宮室。己亥、謂侍臣曰、「昨太子生日、皇后獻朕一物、大是珍異、卿試觀之」。即出諸絳囊中、乃田家稼穡圖。「后意太子生深宮之中、不知民間稼穡之艱難、故以為獻、朕甚賢之」。

2・3、「鯉魚蘆雁図屏風」(寺田静夫氏蔵)

六曲一双屏風。紙本著彩、金粉。

右隻、縦一五四cm×横(五十六cm + 六十二cm + 六十二cm + 六十二cm + 五十六cm)。

左隻、縦一五四cm×横(五十六cm + 六十二cm + 六十二cm + 六十二cm + 五十六cm)。

制作年、明治三十四年

署名、「花蹊女史」(右隻、左隻共)

印記、跡見(朱文方印、陰刻)、「瀧」のみ陽刻)

花(朱文方印、陽刻)

本『花蹊日記』の明治三十四年各条下にこの屏風の揮毫についての記事が見える。要約すると以下のごとくである。

二月三日、天下茶屋寺田理恵氏死去。

五月十日、天下茶屋寺田善左衛門、田中三五郎両氏より書至り、金百円にて屏風潤筆の依頼あり。(寺田理恵氏の百箇日前後に当たる)

五月十一日、両氏へ承諾の書を寄せる。

八月十七日、右隻鯉魚之図の制作に掛かる

八月十九日、右隻落製。

八月二十七日、左隻蘆雁落製。

九月七日、屏風を箱に入れ、小包にて寺田氏へ出す。

九月八日、寺田善左衛門氏へ屏風送付の書を寄せる。

寺田家は、大阪天下茶屋の豪農。代々善左衛門を名乗り、この時期の善左衛門は、花蹊とはまたいとこに当たる。理恵は、その父の善左衛門(花蹊といとこにあたる)の妻である。また田中三五郎は、善左衛門の弟であり、近隣の田中彦兵衛の養子となった。したがって善左衛門と三五郎は実の兄弟であり、母理恵の供養のため花蹊に屏風の揮毫を依頼したものかと考えられる。

4、「跡見花蹊写真」(跡見学園女子大学花蹊記念資料館蔵)

鶏卵印画写真。灰色台紙へ貼附。

縦十四cm×横九・九cm(写真面)

制作年、明治中期

撮影者、「東京市本郷区弓町式丁目 中黒実」